令和五年度　入学試験問題　第一日

国語総合・現代文B

第1問

次の文章は、「就業率を高める戦略」について書かれている。これを読んで、後の問（問一～問七）に答えよ。

経済が成長し、女性の学歴が高くなると、女性が経済的に自立できる可能性が拡大するために、女性の(注1)労働参加率は上昇する傾向がある。さらに、［X］とともに、さまざまな便利な新製品が登場し、子供には高学歴の教育を与える必要性が高まる。次々に登場する便利な新商品を消費し、子供に高学歴の教育機会を与えるためには夫一人の稼ぎでは不足するため、妻も働かなければならなくなる。こうした、他の人と同じような生活水準を維持しようとすることも（英語圏には「keep up with the Joneses［ジョーンズ家の奴らに負けるな］」という諺（ことわざ）がある）、ア女性労働参加率を引き上げる要因である。

日本女性の労働参加率はフランスとスウェーデンに比べて、30～50歳までが低い。とくに、スウェーデンに比べると33～64歳にかけては10ポイントから15ポイント程度低い。

フランスの女性労働参加率は、60歳を超えると急低下して日本よりも低くなる。フランスの年金支給開始年齢は62歳で、満額支給年齢は67歳であるが（二〇一九年時点）、男性でも満額支給年齢開始前に引退する人が多い。労働に対する高齢者の調査では「仕事以外にしたいことがあるから働きたくない」という人の割合が高く、フランスの早期引退文化と呼ばれる。

フランスでは若者の失業率が高い時代が長く続いたため、早期引退は若者に職を譲るものとして位置づけられ、高齢者の引退を早めるような政策が採用されてきた。［A］、それでも若者の高い失業率は解消せず、社会保障制度を維持す

るための財政が圧迫されるようになったため、二〇〇〇年代に入って高齢者の就業支援政策に転換した。その一つの手段が二〇一〇年から始まった年金支給開始年齢を徐々に引き上げる政策である。イこうした政策転換により、フランスの女性労働参加率は一九九〇年には、55～59歳が40・8％、60～64歳が12・4％、65歳以上が1・2％だったが、二〇一九年にはそれぞれ74・3％、33・8％、2・5％へと大きく上昇した。

一方、スウェーデンの年金開始年齢は61歳であるが（二〇一七年に今後64歳に引き上げることが決まった）、女性労働参加率は60～64歳でも71％と日本よりも25ポイントも高い。しかし、65歳以上になると、日本の17・7％に対して4・5％と急低下する。

日本の二〇一九年の65歳以上の女性の労働参加率は17・7％と、一九九〇年とほとんど変わっていない。これは、以前から日本の高齢者の中には高所得・高資産家も存在するが、①低年金者で資産もほとんど持たない高齢者も多く、彼らにとっては医療・介護の保険料と医療費・介護費の負担が重く、②余命が長いため（二〇一八年時点で65歳の年金満額支給開始年齢後の平均余命は24・5年間もある）、働かなくてはならない人が多いからであると考えられる。

日本の最近の女性の労働参加率の上昇は、一人当たり実質ＧＤＰを引き上げる要因であるが、短時間（一週間の労働時間が30時間未満）のパートタイムが多いため、日本全体の労働生産性の向上に対する寄与度は小さい。［B］、二〇一九年について見ると、日本の女性のパートタイム比率が35％であるのに対して、フランスは22％、スウェーデンとアメリカは19％である。

日本の女性のパート比率は35％と高いが、非自発的パート比率（パートの中でフルタイムの仕事が見つからず、やむを得ずパートに就いている人の割合）は17％である。一方、フランスの女性パート比率は日本よりも低い22％であるが、非自発的パート比率は36％で、日本よりも19ポイントも高い。このように、日本の女性の非自発的パート比率が低いことは、［　Y　］。それは、税制と年金制度に女性にパートを選択させる誘因が存在するからである。それらは一五〇万円の壁とか一三〇万円の壁と呼ばれる。

一五〇万円の壁とは次のような壁である。[C]、勤労所得者の配偶者の年収が一五〇万円以下であれば、勤労所得者は給与所得(注2)控除前の所得が一一二〇万円（給与所得控除後は九〇〇万円）までであれば、三八万円の配偶者特別控除を受けられるが、配偶者の年収が一五〇万円を超えると、勤労所得者の配偶者特別控除が減額されるため、配偶者が年収を一五〇万円以下に抑制するように就業時間を調整するという壁である。

一三〇万円の壁とは、配偶者が正規社員数五〇一人以上の企業で働き、その年収が一三〇万円を超えると、健康保険料と年金保険料（合計約三六万円）を負担しなければならなくなるために生ずる就業時間の壁である。この壁があるため、配偶者も年収が一三〇万円を超えない範囲で働く時間を調整しようとする傾向がある。

また、多くの企業は配偶者手当を支給するときの配偶者の最高所得を一〇三万円に設定している場合が多く、一〇三万円の壁をつくる要因になっている。

日本には、このような配偶者の就業時間を短縮させる税制と社会保障制度が存在するが、福祉大国のスウェーデンでは、日本とはまったく逆に、働かない限り健康保険にも年金保険にも加入できない。したがって日本のように、夫が厚生年金や共済年金に加入していれば、専業主婦は年金保険料を支払わなくても基礎年金の給付を受けることができるという第三号被保険者制度も存在しない。

このような女性の就業時間を調整させる誘因を持つ税・社会保険制度を改革できれば、女性の就業者数が増え、就業時間も長くなると予想されるから、税収と保険料収入も増えるであろう。[D]、財政再建と社会保障改革が進展する。

また、女性が単純作業以上の業務に就くようになると、男性にないアイディアが生まれて、新製品の開発につながるといった例も少なくない。これは多様性により、付加価値労働生産性が向上する例である。

（岩田規久男著『「日本型格差社会」からの脱却』に基づく）

（注）1　労働参加率……生産年齢人口（15歳から64歳の人口）に占める労働力人口（就業者数と完全失業者数を合わせた人口）の割合。

2　控除……課税対象となる所得等から一定の金額を差し引くこと。

問一　空欄 X に入る最も適切な言葉を、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ア。

① 学歴社会
② 経済成長
③ 男女雇用機会均等法
④ 超高齢化

問二　傍線部ア「女性労働参加率を引き上げる要因」とあるが、日本におけるこれらの「要因」について、筆者はどのように考えているか。次のⒶ～Ⓓについて、それぞれ適切なものには①を、不適切なものには⓪を記入せよ。解答欄は、Ⓐ イ ・Ⓑ ウ ・Ⓒ エ ・Ⓓ オ。

Ⓐ 次々と新しく生まれる商品を購入、消費したいという動機も要因の一つとなっている。
Ⓑ 仕事と育児の両立ができるように、育児支援制度が整備されたことも要因の一つとなっている。
Ⓒ 女性の高学歴化に伴い、社会全体の就業構造が顕著に変化したことも要因の一つとなっている。
Ⓓ 夫一人の稼ぎでは子育てにかかる費用を賄えなくなることも要因の一つとなっている。

問三　空欄 A ～ D に入る最も適切な言葉を、次の①～⑥の中からそれぞれ一つ選べ。ただし、同じものを繰り返し使用してはならない。解答欄は、A カ ・B キ ・C ク ・D ケ。

① ちなみに　② もしも　③ しかし　④ すなわち　⑤ したがって　⑥ もっとも

問四　傍線部イ「こうした政策転換」とあるが、どのような転換か。適切なものを次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、コ。

① 年金支給開始年齢を引き下げる政策から、徐々に引き上げる政策への転換。
② 若者の就職を支援する政策から、女性の労働参加率を高めるような政策への転換。
③ 若者の失業率を減らすための政策から、社会保障制度を確立させるための政策への転換。
④ 高齢者の引退を早めるような政策から、高齢者の就業を促すような政策への転換。

問五　空欄 Y に入る最も適切な内容を、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、サ。

① 女性自らがフルタイムの仕事を望んでいることを示している
② 女性自らがパートを望んでいるケースが多いことを示している
③ 女性がやむを得ずパートに就いていることを示している
④ 女性が就業形態を安易に選択していることを示している

問六　日本における「就業率を高める戦略」について、筆者の論に最も近い考え方はどれか。次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、シ。

① 就業形態を問わず、女性が働きやすい環境を整備し、女性の社会進出を後押しすることが重要である。
② 女性の就業を妨げている税制と社会保障制度を見直し、女性の労働参加率を高めることが重要である。
③ フランスやスウェーデンのように年金支給開始年齢を引き上げ、高齢化の影響を緩和することが重要である。
④ 堅調な経済成長を持続可能なものとするため、女性の高学歴化、高齢者の医療・介護保険料の軽減などを推し進めることが重要である。

問七　本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ス。

① 日本女性の労働参加率は、フランスやスウェーデンと比べて30～50歳までは低いが、これには各国の年金支給開始年齢が大きく関係している。
② 日本において65歳以上の女性の労働参加率が、一九九〇年からほとんど変わらない理由の一つは、働く必要のない高所得・高資産家の高齢者が多く存在しているからである。
③ 近年、日本においても女性の労働参加率は上昇しており、日本全体の労働生産性の向上に大きく貢献している。
④ 現在の日本には、「一五〇万円の壁」や「一三〇万円の壁」と呼ばれるような就業時間を短縮させる税制と社会保障制度が存在し、そのことが女性の短時間労働を助長している。

第2問　次の文章は冬眠のしくみや効用について書かれている。これを読んで、後の問（問一～問七）に答えよ。

冬眠を制御するシステムから垣間見える生命の世界では、ア<u>そこで働くソフトウェア</u>が細胞というハードウェアを調整して独自の時間を作り出し、イ<u>相対する二つの季節</u>を制御している。それは、自然界の季節のように、二つのピークを連続的に往復する規則正しい生理的な振動となって現れる。

この冬眠システムが作り出す二つの時間には何が隠されているのだろうか。

一つの季節は、われわれヒトが常に経験している活動的な時期である。

体は絶え間ない外界とのやり取りに多くのエネルギーを使っている。特に、ヒトが生活する人間社会では、生存のための活動ばかりか社会的ストレスにも曝されており、これに対応して体が消費するエネルギーは際限なく増える。この活動時期には、刻々と変化する外界の状況を感知し、それを処理して対応するため全身の組織や器官は脳の支配を強く受け、脳神経系を中心にした高速の処理がなされる。つまり、自動車を素早く動作させるためにアクセルを常に踏み込んだまま、ブレーキで速度を調節するようなもので、素早い反応と引き換えに過剰のエネルギーを消費する。

常に三七℃の高い温度に温められている哺乳類の体は、このような状態にあると考えられる。脳がすべてを支配して、多くのエネルギーを外界との対応に消費してしまう。つまり、体が使うことのできる唯一のエネルギー物質である（注1）ＡＴＰは、それぞれの器官の細胞が外界に対して仕事をすればするほど失われていく。

このことは、本来もっとも重要なはずの体の保守を、残ったエネルギーで賄うしかないことを意味している。常に高い活動性を保証された哺乳類の体では、働けば働くほどそれにエネルギーが消費され、その分体の保守はおろそかになってしまう。ヒトを含む冬眠できない哺乳類はこの一つの季節しか作り出せず、宿命的に消費型の体となっている。

二つ目の季節は、ウ<u>冬眠によって顕在化されるもの</u>で、われわれの体では見ることのできない状態である。

この時期には体温は数℃まで下がり、まるで仮死状態となる。体内で細胞の働きを支えるすべての化学反応は、通常の

五〇分の一～一〇〇分の一という驚くべきスローペースで進行するのだが、細胞や組織は生命維持に十分な生き生きとした活動を続けている。このゆったりと流れる生命の時間の中では、心臓の拍動も、脳の情報処理や思考も、全身の細胞や組織への指令も、それらを含むあらゆることに消費されるエネルギーも、限りなく一〇〇分の一へと近づく。

脳神経系を介する素早い反応は鳴りを潜め、その支配への依存度は限りなく低くなる。体は外界とのやり取りをほぼ完全に断ち、体外への仕事にエネルギーを消費することはほとんどなくなり、体に蓄積されたありあまるエネルギー源は体内の仕事に費やされる。つまり、活動時期とはまったく逆に、体は外界から遮断され、閉じられた系へと切り替えられるのである。

このように切り替えられた体の状態では、器官は脳の支配から解放され、それぞれに適した働きをしながら自立した最も効率的な生存が可能になる。外界では冬の不毛の季節が到来しており、エ これを難なく生き延びるために最適の生命システムなのである。実際、この時期の体内では、血液に信じられない程多量の脂肪が含まれているし、静脈にもまるで動脈と見まがうような多量の酸素を含んだ血液がゆっくりと流れている。つまり、全身がエネルギー源と酸素に満ち満ちていて、不毛の外界からは想像もつかない世界が展開されている。

A 、冬眠中の体ではすべての働きが停止し、低温に苛(さいな)まれながら耐えに耐えているように見える。 B 、閉じられた体内では外部へのエネルギー損失は極度に抑えられ、豊かな体内環境のもとで各器官は自立性を高め、独自に最適な働きを続けている。あらゆる細胞は、ほかの細胞が生む負担から解放され、長期的な休息の時期に入り、生存に必要なエネルギーは最低限で済む。その分、体の保守に集中的にエネルギーを使える体制が整えられる。活動時期に疲弊した部位を回復させたり、傷ついた部位を修復したり、寿命が尽きかけた細胞を再生したりと、ありとあらゆる手段を講じて体を蘇(よみがえ)らせるためにエネルギーを使う体制が作り上げられる。 C 、致死的な病気から体を護(まも)ることなど到底できない。 D 、外界から遮断された閉鎖系へと切り替えられた冬眠中の体は、内部循環型の効率的なエネルギー利用により、体内環境を蘇らせ、生命維持を可能にしている。

冬眠を制御するソフトウェアには、われわれの体を健康に保つためのこのような調整の仕方が書き込まれている。この調整はエネルギーの使い方に帰結され、体外へのエネルギー放出を極力抑え、内部で使用できるエネルギーを増やすことにある。このエネルギーの使い方を調整するのが、冬眠を制御するシステムと考えられる。

恒温動物では、体温低下によって体が受ける恩恵は少なくない。将来、冬眠できる体への調整法が確立され冬眠能力を高めることができれば、まず考えられるのはやはり、低体温の利用だろう。シマリスのように〇℃近くまで体温を下げられれば、脳ばかりか、体のあらゆる組織の傷害や炎症の進行を止められるし、代謝が極限まで下がっているので体内に蓄えられたエネルギーもほとんど失われない。

その一つが、低体温治療である。脳梗塞ばかりか心筋梗塞や癌はもちろんのこと、細菌やウイルスなどによる感染症などのあらゆる進行性の病気の治療が一変する可能性が出てくる。脳梗塞も心筋梗塞も血管が塞がって血液が細胞に届かなくなるため、細胞がエネルギー不足になり時間とともに壊死を起こす。癌細胞は旺盛な代謝を背景に増殖と転移を繰り返し、体の正常細胞を蝕んでいく。感染症も、体の高い代謝に依存して進行することにより拡大し、体を害する。

もし、ヒトの体を冬眠状態にして〇℃近くまで体温を下げることができれば、体の中の変化は超スローモーションの映像を見るようにほとんど止まって見える。実際に冬眠中のシマリスの体では、代謝は通常の一％ほどの速度でしか動いていないので、代謝に依存する病気の進行も少なくとも九九％近くまでは抑えることができるはずだ。病気の部位が限られていれば、その部位だけをより低い温度にすることも可能になる。このような状態では、心臓の拍動数もわずかで出血もほとんどなく、わずかなエネルギー需要のため血流を止めておける時間も飛躍的に延び、外科的手術での体への負担や、時間的制約の問題も大幅に改善される。そればかりか、冬眠中のシマリスの実験では、低体温にもかかわらず外科的手術による傷口も化膿しないし、治癒も早い。

さらに、低体温では神経の反応性も低下して低温麻酔状態となるので、痛みも著しく抑制されるし、麻酔薬が必要な場合でもわずかな量でしかも、局部の麻酔で済むと考えられる。火傷をしたときに、氷で冷やすと痛みがなくなり、炎症の

拡大も防げるのは低温の効果である。事故で切断してしまった指を氷で冷やして壊死を防ぎ、無事に接着できた例などもある。臓器移植のために体から取り出した心臓や肝臓、腎臓などの臓器を低温で保存するのも、この細胞保護効果を利用したものだ。

冬眠からは、われわれの日常生活や病気を考える上でのオ貴重なメッセージも発せられている。

体温低下一つを取ってみても、ヒトから見れば立派な低体温症であり、そのまま放置すれば凍死に至る致命的な病気である。それが冬眠時期には、病気どころかまったく逆に体を蘇らせる。

体温は三七℃と正常であるにもかかわらず、冬眠時期に先行して血中では高脂質や高インスリン状態が観察され、肥満となり、冬眠時期には鬱状態、食欲不振、血中の高脂質や低インスリンなどと、鬱病や代謝病の顕著な症状が見られる。

もし、このような時期に診察がなされたら、異常な状態（病気）と判断され、生きていること自体を不思議に思うに違いない。だが、冬眠できる状態に切り替わった体では、この症状は生命を護る重要で自然な生理的変化なのである。

このような例を見ると、標準状態からずれたという判断による病気とはいったい何かを考えざるをえない。つまりここには、内的な生理的調節に基づく（注2）リズミックな変化なのか、外部から与えられた過度の刺激が生んだ慢性的歪（ゆが）みなのかという問題が含まれている。

もし、この変化がシマリスに毎年起こる冬眠時期に現れたなら、最上の健康状態で体を蘇らせていると考えられるが、冬眠できない時期なら、体に何らかの異常が起こり致命的な病気が進行していると考えられるだろう。

冬眠時期にこのような変化を妨げる治療をしてそれ以前の状態に戻したなら、その結果は冬眠できないシマリスと同様に、病気しやすい短命な一生を作り出すと想像できる。

このように、冬眠の真実を知ることによって、ヒトでも長期的な固有のリズムが作り出され、内的な調節により一層の健康な状態が維持されている可能性を推察することができる。リズムに支配され、一定の長期的振動を繰り返す（注3）HPに類似した分子がわれわれの体内にも存在しているはずだし、自然の中での四季の変化が五感を通して脳機能を調整

し、このリズムをさらに増幅していると考えるのはけっして不自然ではないだろう。

だが、現代社会に生きる人間は、機械文明により一年を通して変化のない一定した人工環境を作り出している。その中の生活では、この内的なリズムはますます弱体化し、消失の一途を辿っていることだろう。このことを物語るように、冬眠によって回避されるさまざまな病気がヒトの病死のトップにランクされ、日々増加し続けている現状がある。

体内で（注4）概年リズムがどのようにして作り出されているのか、どのような物質がそれに関わっているのか、作られたリズムを体全体へ伝える信号物質はどのようなものか。この答えが得られたとき、われわれはこのリズムを作り出し、強化する方法を知ることができるだろう。

（近藤宣昭（こんどうのりあき）著『冬眠の謎を解く』に基づく）

（注）1　ＡＴＰ……アデノシン三リン酸（adenosine triphosphate）という、細胞内で作り出される高エネルギー化合物のこと。

2　リズミックな……ここでは「生物の体内時計に即した」の意。

3　ＨＰ……冬眠特異的蛋白質（たんぱく）（hibernation-specific protein）と呼ばれる、冬眠に必要と考えられる蛋白質のこと。筆者によるシマリスの冬眠実験で発見された。

4　概年リズム……おおよそ一年周期で変動する生物の生理的現象。

問一　傍線部ア「そこで働くソフトウェア」とあるが、「ソフトウェア」の最も重要な役割は何か。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ア。

① 最も重要な役割は季節の感知機能であり、生命が危機に曝される冬の到来をいち早く察知して冬眠に入ることによって、食物不足による飢餓の時期を乗り越える機能を持っている。

② 最も重要な役割は脳神経系の制御であり、細胞に対する脳の支配を強めることで体を外界から遮断し、異なる体内環境のもとで効率的な生存を可能にする機能を持っている。

③ 最も重要な役割はエネルギーの使い方の調整であり、冬眠時にできるだけ対外放出を減らし体内使用量を増やすことができるように調整する機能を持っている。

④ 最も重要な役割は細胞の活性化であり、冬眠時に細胞が仮死状態に陥ることを避けるために、各器官の自立性を高め、細胞の働きを支えている化学反応を活性化させる機能を持っている。

問二　傍線部イ「相対する二つの季節」とあるが、どのような点で相対しているのか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、イ。

① 一方がエネルギーに満ちた三七℃の高温状態であり、一方が致死的な病気に至る数℃の低温状態である点。

② 一方が外界に対する積極的な活動時期であり、一方が自身の内省を目的とした休息時期である点。

③ 一方が代謝の高速処理が可能な段階であり、一方が低温の条件下で低速処理を余儀なくされる段階である点。

④ 一方が外部に開かれたエネルギー消費型の状態であり、一方が閉じられた内部循環型の状態である点。

問三　傍線部ウ「冬眠によって顕在化される」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ウ。

① 通常時とは異なる外見の変化が、冬眠状態に入ると明確に始まるということ。
② 体内変化はふだんは観察が難しいが、冬眠によって動きが停止したとき、観察が容易になるということ。
③ ヒトと同じように見える動物の体内状態が、冬眠することで特有の状態を示すようになること。
④ 体内の変化は、ヒトを含む冬眠できない哺乳類では自覚されずに隠れているということ。

問四　傍線部エ「これを難なく生き延びるために最適の生命システム」とはどのようなシステムか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、エ。

① 厳しい冬の自然環境からの自立を可能にする、哺乳類が長い進化の過程で自然に適応するために獲得してきた高度で複雑な恒温システム。
② 不毛の冬の季節において、その危機の時期を体内に蓄積された豊富なエネルギー源で乗り切ることを可能にするシステム。
③ 本来は最も過酷な環境である冬の季節に、外界から遮断された体内閉鎖系へと移行することによって、エネルギー使用量を倍増させるシステム。
④ 安定した人工環境の創出によって異常低温による絶滅の危機から生物を護り生命を維持してきた、人類の努力の結晶ともいうべきシステム。

問五　空欄 A ～ D に入る最も適切な言葉を、次の①～④の中からそれぞれ一つ選べ。解答欄は、A オ ・B カ ・C キ ・D ク 。

A　①　それゆえ　②　つまり　③　一見すると　④　なぜなら

B　①　言い換えると　②　しかし　③　なるほど　④　だから

C　①　そうでなければ　②　それでも　③　そうなると　④　そうだからこそ

D　①　だが　②　その後　③　もっとも　④　このように

問六　傍線部オ「貴重なメッセージ」とあるが、どういう点を指して「貴重」と言っているのか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、 ケ 。

①　ヒトならば明らかな病気であると判断される状態が、冬眠時期のシマリスにおいては最上の健康状態で体を蘇らせていると考えられるように、生物の種別を考慮した治療の必要性を知ることができる点。

②　現代社会に特有で顕著な病気であると考えられている鬱病や代謝病が、実は古くから存在していた、過度の外部刺激が生んだ慢性的歪みであることに気づかせてくれた点。

③　肥満や食欲不振のような日常生活の習慣病は、安易に考えて治療方法を誤ると、逆に病気に陥りやすい短命な体を作り出しかねないという教訓を与えてくれる点。

④　従来、標準状態からずれていることによって病気と判断されていた変調が、実は内的な生理的調節に基づくリズミックな変化である可能性が示されるなど、病気とは何かを考える契機となっている点。

問七　この文章全体の構成についての説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、コ。

① 最初に問題提起を行い、その問題について第一の観点から具体的事実を挙げて解説している。次に、同じ問題を異なる第二の観点から説明し、その説明がヒトの医療へ応用可能であることを主張している。そして、病気に対する認識そのものに課題があることを指摘し、その課題に対する解決策を提示して終わっている。

② まず論の目的を明らかにし、その目的達成のための二つの方法を明示する。第一の方法で通常時の状況説明を行い、第二の方法では非常時の事例を提示している。次に、現代社会におけるヒトの病例とその治療法を詳述し、第二の方法が有効であるという見解を示す。最後に結果の概要をまとめ、発展的な話題で締めくくっている。

③ まず問題提起を行い、二つの異なる状態を比較検討し、問題の解答を述べている。次にそれらの状態について、医療における低体温治療等への利用可能性を述べ、さらに、従来病気として一くくりにされていた状態を見直す余地が生じていることに言及している。最後にヒトへ適用するにあたっての課題と可能性を指摘して終わっている。

④ 最初に問題を提起し、次に、その解答を導くために二つの異なる実験を報告している。その結果から、提起された問題に対する解答の一部を述べている。続いて、ヒトの病気と冬眠との関係について、利害両面から想定される仮説を検証し、最後に問題に対する解答をまとめ、予想される反論に応えて終わっている。

第3問　次の各問（問一～問八）を読んで、それぞれの指示に従って答えよ。

問一　次のA～Dの傍線部のカタカナと、各群の①～④の傍線部のカタカナが同じ漢字となるものを、それぞれ一つ選べ。解答欄は、A［ア］・B［イ］・C［ウ］・D［エ］。

A　大切にしていた木がクち果ててしまった。
① 線路の復キュウ工事が行われている。
② 部屋が狭くてキュウ屈に感じられる。
③ 家屋の老キュウ化が急速に進んでいる。
④ 砂キュウに生息する生き物を調べる。

B　悲願を成ジュする。
① 大臣の去シュウが注目される。
② 有シュウの美を飾る。
③ 国語辞典を監シュウする。
④ 哀シュウが漂う曲を弾く。

C　カン楽器を演奏する。
① カン轄区域を巡回する。
② 戦場から無事に帰カンする。
③ 中央カン庁に勤める。
④ 小人カン居して不善をなす。

D　彼女はホガらかに笑った。
① ロウ若男女が一堂に会する。
② 新ロウの挨拶が始まった。
③ 詩のロウ読会に参加する。
④ ロウ務管理に頭を悩ます。

問二　次のA～Dの各群において、漢字の読み方（カタカナ表記）が正しくないものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A［オ］・B［カ］・C［キ］・D［ク］。

A
① 漸進（ザンシン）
② 躍如（ヤクジョ）
③ 教唆（キョウサ）
④ 窯業（ヨウギョウ）

B
① 福音（フクイン）
② 多寡（タカ）
③ 疾病（シツビョウ）
④ 市井（シセイ）

C
① 鋳（イ）る
② 紡（ツム）ぐ
③ 忌（ウト）む
④ 陥（オトシイ）れる

D
① 時宜（ジギ）
② 緑青（リョクセイ）
③ 玄人（クロウト）
④ 製靴（セイカ）

問三　次の四字熟語を含む文A～Dの□に入る最も適切な語を、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A［ケ］・B［コ］・C［サ］・D［シ］。

A　自家□に陥る。

①　宣伝　②　膠着（こう）　③　癒着　④　撞着（どう）

B　一攫（かく）□を狙う。

①　千円　②　千人　③　千両　④　千金

C　自動車メーカーの合従□はまだまだ続きそうだ。

①　連衡　②　同一　③　連道　④　合一

D　いろいろと調べてみたが、どの資料も隔靴□の感がある。

①　痛痒（よう）　②　拘泥　③　掻痒（そう）　④　同様

問四　次のA～Cの四字熟語の□に入る漢字一字と、四字熟語の意味の組み合わせとして最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A［ス］・B［セ］・C［ソ］。

A　一日□秋

① 千　待ち遠しくて時間を非常に長く感じること。
② 泉　湧き出る泉のように永久不変であること。
③ 鮮　一年のうち最も鮮やかな秋の名月のこと。
④ 染　身も心も自然の中にあって感傷に浸ること。

B　自□自縛

① 乗　自分から乗った話に束縛されること。
② 縄　自分の言動で自分が束縛されること。
③ 状　自分の現状が自分の将来を束縛すること。
④ 条　自らの信条が自分自身を束縛すること。

C　明鏡□水

① 私　自らの行為を振り返り、謙虚な気持ちで心の底から反省すること。
② 師　恩師の教えを忠実に守り、技に磨きをかけること。
③ 視　物事を細部まで十分に観察し、信頼性の高い結論を導き出すこと。
④ 止　心に何のわだかまりもなく、澄みきって静かな状態であること。

問五　次のA～Cの言葉の意味として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A［タ］・B［チ］・C［ツ］。

A　ねんごろ

① 親密な様子。
② 興奮する様子。
③ 寝るころ。夜分。
④ 一年中。

B　つつましい

① 歯がゆく、情けない様子。
② かいがいしく病人の世話をする様子。
③ 温かい愛情に包まれている様子。
④ 遠慮深く、控えめである様子。

C　したためる

① 文章を書くこと。
② 雨漏りがすること。
③ 他人のものを盗むこと。
④ 悔しさのあまり舌打ちすること。

問六　次のA・Bにおいて、傍線部の漢字の意味が他と異なるものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A［テ］・B［ト］。

A　①　和歌　②　和服　③　和議　④　和訳

B　①　日没　②　日用　③　日常　④　日録

問七　次のA・Bの傍線部の語句の意味として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A［ナ］・B［ニ］。

A　会議での彼の鷹揚（おうよう）な態度が話題となった。

①　ゆったりとして落ち着いた。

②　おごりたかぶって無礼な。

③　率直で遠慮がない。

④　大げさでわざとらしい。

B　求められれば協力することもやぶさかでない。

①　仕方がない。

②　惜しまない。

③　拒まない。

④　逆らえない。

問八　次のA～Cの語句の使い方として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。
解答欄は、A［ヌ］・B［ネ］・C［ノ］。

A　物議

① 彼が物議を示してくれたおかげで、結論が出た。
② 当時、大物政治家の贈収賄事件が物議を醸した。
③ あの事件は物議が不十分で、迷宮入りとなった。
④ いつ犯罪に巻き込まれるかわからない物議な世の中になった。

B　名代（みょうだい）

① 兄は父の名代として町内の会合に出かけた。
② あの歌舞伎役者は先日、父親の名代を継いだ。
③ このような賞をもらい、選手名代に尽きる。
④ これは私の地元で名代の菓子だ。

C　しめやかに

① 歓声に包まれて、祝勝会がしめやかに始まった。
② 祝賀ムードの中、授賞式がしめやかに行われた。
③ 大勢の列席者を迎え、結婚式がしめやかに執り行われた。
④ 雨の中、葬儀がしめやかに営まれた。

〔国語の問題は以上です〕